

〔障害児教育メール 2019〕7

2020年1月20日 全教：佐竹葉子

1. 第19回全国障害児学級&学校学習交流集會に全国から830人



1月11日から13日の3日間にわたり、兵庫県神戸市で「第19回全国障害児学級&学校学習交流集會 in 兵庫」が開催され、全国から830人の教職員や学生、保護者、市民、学生らが集いました。

開会全体会は、障害のある子どもたちのダンスで始まり、阪神淡路大震災の経験から生まれた歌「しあわせをはこべるように」の合唱も披露されました。障害

のある青年たちの新喜劇に会場は大笑いでした。

「養護学校義務制40周年企画」として、三木裕和さん(鳥取大)が、「時代を超えた『切なる願い』に答えるために一あの頃の未来にぼくらは立っているのかな」と題したミニ講演を行い、これまでの教育権獲得運動をふりかえりつつ、「今、40年前学校に行けなかった子どもたちが行きたいと願う学校になっているのか」と問いかけました。「職業技能検定に見られるような教育が、私たちが求めてきたものなのか。学校が希望の持てるような場になり得るかが問われている。40年の歴史のなかで私たちに向けられた願いを考えていこう」と呼びかけました。

赤木和重さん(神戸大)は、「障害児教育の魅力を変えて考える～発達理解の視点から～」と題した記念講演で、実践や事例を紹介しながら、実践を、改めて発達の視点で見ることの大切さを話されました。そして、「子どもたちも、教師も、追いつめられている。知らず知らずのうちに、生産性の低さを、障害のある子どもにあてはめるような見方となっている社会になっているのではないか。私たちは子ども理解をしっかりとすすめることで、社会も変えていく力をつけましょう」と訴えました。

2日目は、午前中に「てんこ盛り講座」と「文化バザール」、「震災遺構を訪ねるフィールドワーク」が行われ、午後に「実践分科会」と「基礎講座」が行われました。

てんこ盛り講座も、文化バザールも内容が多彩で、各教室で真剣に話を聞く姿、熱心に制作等にとりくむ姿が見られました。「分科会」では、各分科会で2～3本のレポートをもとに熱心な討議がくり広げられました。論議を深めることができたという意見が多数寄せられました。

3日目は、「子どもが安心して過ごせる学校づくり」「子どもから出発する学校づくり・授業づくりの視点で学習指導要領を考える」「ゆたかな教育を保護者と教職員の共同で」「災害時の避難と支援の在り方」の4つのテーマで「教育フォーラム」を行いました。それぞれのフォーラムのテーマが、現在の学校の課題と大きく関連するテーマでした。

次回は岐阜県で開催(2021年1月9日～11日 岐阜大、他)します。来年もたくさんの方の参加をお待ちしています。

2. 特別支援学校の設置基準の策定をめぐって

11月のメールニュースで文科省が「設置基準について検討する」と回答したことをお知らせしました。「東京新聞」(1月19日付)によると、同社の取材に文科省は「『新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議』の中で、教室不足など教育環境整備の問題をどう解決するか、設置基準の策定についても一つのオプションとして検討される方向」と述べたとのことです。

私たちの運動が情勢を動かしたことは間違いありませんが、国任せにしていたら、何の歯止めにもならない「設置基準」になってしまう可能性も大いにあります。どのような設置基準を求めていくのか、具体的に示して要求していくことが早急に必要です。

1月13日の学習交流集会終了後、全教障教部役員と兵庫高の障教組の役員が、研究者の方々とこの問題について懇談をもちました。

その場では、私たちができることとして「法務局の人権侵害の救済制度を利用することも考えられる」との意見があげられました。

また、「設置基準で盛り込ませたいことを具体的に示していくこと」の重要性も懇談の中で明らかになりました。署名については「本気で動かすならば20万の署名が必要」という意見や、設置基準の策定を「知事選や市区町村長選などの首長選挙の公約に入れてもらうこと」の意義も示されました。

早急に、障教部事務局会議や常任委員会でも方針化していきたいと思います。

各地からのご意見もお寄せください。